

## 『業平夢物語』考

——ロマンス・怪奇・発心譚の業平幻想——

数多いお伽草子の中に、『業平夢物語』という作品がある。本当に短い作品で、題名の「夢」の文字とも相乗して、いかにもはかない感じが漂う。『お伽草子事典』(東京堂出版、二〇〇二)には立項されているものの、解説の多くは異本の『赤松五郎物語』に費されていて、『業平夢物語』に関する解説は多くない。本文は、『続お伽草子』(岩波文庫、一九五六)に翻刻されているのみ。原本は絵巻物で永森書店旧蔵の由であるが現在、所在不明。『続お伽草子』解説によれば、原本に題簽はなく、『業平夢物語』は旧蔵者による仮題という。ロマンチックな題名も近代の命名と知られる。なお本作品は『室町時代物語大成』には収載されていない。物語のあらすじは、

長治二年四月、昼寝の夢に、紫野のあたりを彷徨して

沢 井 耐 三

いるうち、雲林の跡かと思われるところで、散り残った桜がひとときわ美しい古い屋敷が目にとまり、築地の崩れからそと中に入ってみる。寝殿の室内では若い女房たちが桜に戯れ、几帳の傍らには琵琶を弾くゆかしい女性を見るが、その顔はさだかに分らない。隠れて覗いていると、この家の老尼に見とがめられるが、会話を交わすうち、室内の女性は二条の後、折しも恋人の訪れを待っているところと聞く。いよいよ期待して注視していると外の方に牛車の音がする。室内の明かりが消され御簾も下ろされ、蠟燭のみのかすかな明かりの中、人影が室内に入ってきて来て、すわ業平の来訪と思われたとき、門外にたむろして話をしていた男たちどつと笑う声が聞こえて夢が覚めた。

夢の後に詠んだ歌二首。

覚めてのちうつゝにものゝかなしきははかなき夢とい  
かでいはまし

とてもかくうつゝに人のこひしきはさめざらましをう

たゝねの夢

というものである。長治二年は一一〇五年、物語の中で主人公の男性が夢を見た年ということになるが、この年号に特別の意味があるのかどうかは分からない。それよりも主人公が、そぞろ歩きをしている「雲林の跡」<sup>(マコ)</sup>の方を注目すべきと思われる。雲林院は京都の北、現在の大徳寺のあたりにあつた寺。今は大徳寺の近くに小さな観音堂一字にその名を残し、町名に雲林院町があるのみ。この雲林院は最初、淳和天皇の離宮として建てられ、のち仁明天皇の皇子常康親王の旧居となり、親王が出家した貞観一年（八六九）遍照に預けられ、天台宗の寺に改められた。貴族の信仰を集め、桜の名所としても名高く、こゝで行われた菩提講も盛行した。南北朝ころには廃れていたらしく、大徳寺創建にあたって寺域はそこに吸収された。<sup>(2)</sup>謡曲『雲林院』はこの寺を舞台とした作品で、芦屋の公光という男性が、雲林院のあたりで業平・

二条の后が連れそう夢を見て上京し、雲林院を訪れるというところから始まり、『業平夢物語』との関わりが指摘されている。<sup>(3)</sup>

## 一 謡曲『雲林院』

能の『雲林院』は成立、作者ともに不明。世阿弥以前にもさかのほる古い作品と考えられている。世阿弥自筆本『雲林院』が伝わっているが、現行曲とは後場において大きく異なっている。現行曲は世阿弥以降、その女婿、禅竹（一四〇五く七一）の改作かとされている。世阿弥自筆の本文は古典大系『謡曲集』上に収載されている。<sup>(4)</sup>その内容は、

（前場）若くより伊勢物語を愛読していた津の国芦屋の公光が、夢に業平・二条の后が立ち並び、所は紫野の雲の林と語るのを聞いて、都に上り雲林院に至る。公光が桜の枝を手折ると、老人が現れて見咎める。公光はとても散るべき花、乞うも盗むも情ありと抗弁し、素性法師の「見てのみや」の和歌や蘇軾の「春宵一刻值千金」の詩をめぐつて問答を交わし、公光がこゝへ

来た訳を説明すると、老人は「これこそ二条の後の御山荘の跡にて候へ」と教え、桜の下臥しして夢を待つように言つて消えて行く。

(後場) その公光の夢に美しい女性が現れ、二条の后と名乗り、伊勢物語の故事を語るところに、黒髪を乱した後の兄の基経が現れ、業平に連れ出されて塚穴にいた二条の后を取り返して帰って行く。雲林院の花の下に目覚めた公光は基経も二条の后も全て夢であったことを知る、というもの。

これは世阿弥自筆本のテキストに拠つたが、特徴的なのは後場で二条の後の兄である藤原基経が登場し、いわゆる「鬼一口」の場面を演じていることで、前ジテの老人が業平の化身なのに、後場では基経に入れ替わる不自然さが以前から指摘されている。<sup>5)</sup> 一方、現行曲では、前場はほとんど同じながら、後場に基経は登場せず、業平の霊が現れて、二条の后を連れて逃げるさまを語り、「忍び出づるや二月の黄昏月も早入りて、いと、朧夜に、降るは春雨か、落つるは涙か」としおれ消えて行く。基経の霊が現れることはない。

この謡曲の題名にもなっている雲林院、実のところ、

伊勢物語とも業平とも無縁の場所ので、『謡曲集』上は「雲林院は淳和天皇の離宮だった。二条の後の別荘の跡という説は典拠不明。本曲が場所を雲林院に設定したのもこの俗説に基づくと思われる」とする。明和九年(一七七二)刊の『謡曲拾葉抄』<sup>6)</sup>は「雲林院に源氏物語の作者紫式部の墓あり、依て次第の詞に、紫の雲の林を尋ねんとつゞけたり。(略)是は源氏花宴巻に源氏の君、弘き殿の細殿にて朧月夜の内侍にあひ給ふ事あり。謡の作者是を業平二条の后に取あやまれる歎」と記している。

このように雲林院自体は、伊勢物語と関係がなく、またワキとして登場する公光についても全く不明であるが、謡曲『雲林院』には伊勢物語憧憬の強い気持ちが見取される。謡曲の前場では、

われ若年のいにしへ、さるおん方より伊勢物語を相伝し明け暮れ玩び候、ある夜の夢にとある花のもとに束帯ひ給へる男、紅の袴召されたる女性、かの伊勢物語の冊子をご覧じて、木蔭に立ち給ふを、あたりでありし翁に問へば、これこそ伊勢物語の根本、在中将業平、女性は二条の后、所は都、紫野の雲の林と語ると思ひて、夢さめぬ。

と語られている。

お伽草子『業平夢物語』は、この『雲林院』の業平・二条の後の逢瀬の場面に、筆者自らも参加する形の物語を再構築しようとしたものと言えよう。なお天正狂言本に「公光」があり、夢に業平、二条の后を見た公光が、雲林院を訪ね、そこで花摘む女性と口論になり、伊勢物語の「うるさし」という言葉によって決着がつくというもの。現行曲「右流左止うらさし」の原型。『雲林院』受容の社会的な広まりが窺える。

## 二 国籍類書本『夢物かたり』

絵巻物『業平夢物語』は孤本で、目下のところ他に所在をきかない。この作品にアプローチする何か手立てがないものかと考えているうち、二種の興味深い資料が見つかった。一つは今西實氏が紹介された「国籍類書」所載の『夢物かたり』<sup>(1)</sup>であり、もう一つは元禄八年（一六九五）刊の怪談集『玉櫛笥』巻四に載せる「雲林院」である。

今西實氏の論考「夢物語二題（翻刻）」は、天理図書館

館蔵「国籍類書」という叢書の中に載る『夢物かたり』という一文が、『業平夢物語』の一異本であることを発見し、その全文を翻刻されたものである。氏はこの『夢物かたり』と『業平夢物語』、さらには『赤松五郎物語』とを比較されて、それぞれの特徴を洗い出された。次に、そこで指摘された諸点を箇条書きで掲出してみる。

(一) 『業平夢物語』は、業平・二条の後の密会を覗くだけであるから、『夢物かたり』が原題であろうか。

(二) 『業平夢物語』の業平登場のところに「かの尼のいひし歌もこゝぞかし」という一文があるも、前文の中にこれに対応する尼の歌は記されておらず、「続お伽草子」の註に「作者の錯覚か、あるいは脱文か」と指摘されている問題箇所がある。これに対し、『夢物かたり』には約千字あまりの記述があり、尼の歌も含まれているので、この部分を何らかの理由で脱したものであろう。

(三) 『業平夢物語』は、二条の后を恋した男が夢覚め、いかにも不思議な夢であったと述懐し、二首の詠歌を載せて終わっているが、『夢物かたり』ではこの後も物語は続き、二条の后に恋した主人公の男が病気になる

り、「結ばれぬ……」「露の身の……」の和歌を残して死去する。三年後、唐櫃の中からこの歌が見出された。この夢物語は赤松美作という人が夢で二条の后を恋して終にむなしくなつた経緯を、後の人の物語にもと書き記したものであると記して、物語を終えている。巻末に添えられた和歌六首は物語とは直接の関係はないだろう。

という指摘であつた。

(三)の問題は後節に譲つて、ここでは(二)についても少し詳しく見ておきたい。今西氏が指摘されたように、『業平夢物語』には大きな脱文が認められる。それは『続伽草子』の四四頁の「殿のほかよりいらせ給ふ」と答へけり」と「是はげにも闇の現よりもなを」との間に位置する約千文字。その内容は、室内の女性が二条の后であると聞かされた主人公の男が、伊勢物語は大昔の話、それでは「後の殿」という人は夫君である清和天皇かと聞き返すと、尼は「業平の中將」という。男はそこでこれが入内する前の二条の后だと気づく。尼が「我が通ひ路の関守」の和歌を詠んだのは二条の后だということで、男がそれは五条の后のことではないかと反論すると、尼

はそれは間違いで本当は二条の后のことだと言う。男は「いかに才学の尼であつても」と納得できなかつたが抗弁しなかつた。

ここで、男と尼の問答となつてゐる歌は、いうまでもなく伊勢物語、五段（『古今集』二三、恋三）の、人知れぬわが通ひ路の関守はよひよひごとのうちも寝ななむ

の歌である。男と尼の問答は、男が「五てうわたりにすむ人」とあることからこは五条の后と言つてゐるのに對し、尼は「それみな人あしくこゝろへ給ひ候。いつれもみな二てうのきさきの事にて候。よつき物かたりにも、此ことを申て候」と力説してゐるのである。この部分は『業平夢物語』にも「よひくことのうちも寝な、んの歌は、五条の后とこそ思ひしに、かの尼の語りしにこそ二条の后とは心得たれ」と載せられてゐる。

實のところ、この問答は歌の作者を指してゐるのか、「人しれぬ」の「人」を指してゐるのか、あるいはこの邸の「あるじ」を指してゐるのか、本文の「いたう心やみけり」の人を指してゐるのか、よく分からない問答で、歌の作者ならば業平、邸の「あるじ」ならば五条の后、と解釈

されるもので、二条の後・五条の後論争は奇異に思われる。室町時代、そういう解釈があつたのだろうか。尼が根拠として挙げた『世継物語』（説話集）にはこの歌は見当たらず、また世継物語とも呼ばれる『大鏡』には巻一裏書にこの歌が載るものの特異な注が付されているわけでもなく、『栄花物語』にもこの歌は記されていない。『夢物かたり』も結局、曖昧なままで終始し、男に疑問を抱かせたまま問答を打ち切っている。

続けて『夢物かたり』の男は、訪ねて来る業平をもつと近くで見たいと尼に頼み、妻戸の奥に導かれて、障子の破れから女性の部屋を覗くことになる。室内の女性に灯火を背にし、うつむいて琵琶を抱いているため顔は定かに見えない。そのうち灯火を引き寄せて障子の和歌を読もうと顔を向けたとき、男は彼女の顔をはつきりと見た。

以上が『業平夢物語』に欠けている部分である。『夢物かたり』はこのあと「これはけにも闇の現よりも・…」と続き、『業平夢物語』の本文と重なることになる。この欠落部分から見れば、『業平夢物語』は『夢物かたり』あるいはその系統の本文を利用しながら、この部分を省略したのである。『夢物かたり』↓『業平夢物語』の線で

ある。なお今西氏が「『業平夢物語』の本文欠落は『引用者注』原本が絵巻であつたこととも関わるのであろうか」と言われたのは、『業平夢物語』（絵巻）↓『夢物かたり』という道筋を考えられたからだろうか。

『業平夢物語』が削除した部分は、「人知れぬ・…」の和歌をめぐる問答や妻戸の奥に身を隠し、「障子の破れより、覗きて見れば」といつた卑俗さ、あるいは障子に貼られた色紙の和歌を読む姫君（男が隠れているとは知らない）が、男と襖越しに向かい合い、男が「其時御顔ははれく」と見奉りけり」といった露骨などが描かれた部分であつて、省略もやむを得なかつたかもしれないが、

（姫君が）御ひわめしよせ、ともし火をそむけ  
 （転手）てんしゆのかたに、男が隠れているとも知らず、御  
 （髪）くしのまよふすちなくかりて、うちかたふき給へ  
 るに、御かほはさたかにも見えず。かくなとも引給  
 （髪）はす、はんしきでうにすこしひきさして、きやうそ  
 くのをしか、り給ふ。しろくうつくしき御かいなの  
 うへに、御かほもたせて、なに哉らん、ものおもひ  
 たる御けしき、まことに此世の人とおほえず……

とあるような箇所も削除されてしまったのは残念でもあ

る。残念と言えば、今西實氏の貴重な報告が、『お伽草子事典』や関係諸論文の注記に全く記載されなかったことである。その解題・翻刻は『業平夢物語』『赤松五郎物語』の分析において必須の資料であるだけに、実に惜しいことであつた。

なお私が『業平夢物語』を読んだとき、どうしても違和感を拭えなかつたのは、主人公の男が夢から覚めるところでの「うちへ入らせ給へかし、在五中将見奉らんと、わが館のおもてに殿ばらのあまた集まりて、物語してどつと笑ふ声に驚きて、夢はさめにけり」という不自然な文章で、何か業平が事件に巻き込まれるような内容が欠落しているのではないかと思われたことである。この箇所は『夢物かたり』には「これそ中将にておはしますらん、とくしてうちへ入給へかし、見奉らんとしつまりてまつ所に、わかやかたのおもてに、とのほらあまたあつまりて、物かたりしてどつとわらふこゑにおとろきて、ゆめさめにけり」とあつて、「しつまりてまつ所に」の語句が抜けていることによる接続の悪さだと判明したことを付け加えておこう。

### 三 近世怪談『玉櫛笥』

次に、浮世草子『玉櫛笥』<sup>9)</sup>巻四に載る「雲林院」についてみてみよう。そのあらすじは次のとおり。

長祿（一四五七―五九）年中、太田道灌が上洛したとき、家来の村上武平次も供をして上洛、ある日、一人で京の街の見物に出掛け、夕刻せまるころ雲林院のあたりに至つて、急な強風と雨に襲われ、築地を廻らした古御所を見つけて避難する。頃は弥生の末つかた、散り残つた桜の一枝、二枝が美しい。邸の中からは琵琶の音が聞こえ、見れば室内に二十四五の少し年増な女房がおり、琵琶の音は几帳の内から聞こえてくるようである。武平次が注目していると、几帳から現れたのは十七八のあでやかな女性、女房の膝に添い臥して物語し、桜を眺めている様子は優美きわまりないが、その顔は定かには見えない。

そこに歳七八十の尼が現れ、武平次にあの女性は二条の後だと告げる。武平次はそれは大昔の話、彼女がどうしてここにいるのかと問うと、尼は「彼女は殿を待つて」と応じる。それでは殿とは清和天皇かときけ

ば、尼はこれを否定して業平の中將だと言う。そして尼が挙げた「わが通ひちの関もりはよひよひごとにならぬなん」の歌に対して、武平次はそれは五条の后ではないかと言うと、尼は二条の后だと言う。

武平次は尼に、業平がやって来るところを見たいと頼むと、妻戸の奥の、障子の破れから覗くことを教える。姫君は人が覗いているとも知らず、障子に貼った色紙を読むときには、その御顔がはつきりとみえたのであった。それからしばらくして表の方で車の音がしたと思うと、妻戸の内に人が入る気配がして、すわ業平かと思うところに、灯火を運んで来た十二三の少女が火を取り落とし、風におおられておびただしく燃ええがかり、業平も后も炎の中に飲み込まれて行った。

武平次も驚いて、方角も知らず垣をやぶり築地を乗り越え必死に逃げ出し、夜の明け方に平野辺にいた。少し落ち着いた武平次は、さぞかし大火になって大騒ぎになっていることだろうと雲林院の方へ戻っていくと、人々の騒ぎもなく焼亡の跡もなかった。不思議に思い、昨夜の古御所へ行ってみるとそのような建物はあとかたもなかった。

武平次は立ち帰り、道灌にこのことを報告すると、道灌は眉をひそめ「先年、赤松美作守といふ人も、雲林院のほとりにおゐて、かかる怪異を見しと聞きつたふ。これ、業平、二条の後の幽霊なるべし。業平、後のただ人にもあらず帝にまいる給へるを、ひたすら忍びかたらひ給へる邪姪の罪によりて、猶今の世までも同じ思ひの炎にこがれ、ともに苦患をうけ給ふ」と述べ、伊勢物語に親しむことを諫めた。

一読すれば容易に気づくことであるが、ここでは『業平夢物語』や『夢物かたり』と共通する形で進展した話が、最後には業平・二条の後の亡霊、その地獄墮ちという怪談話になっていることである。夢からの目覚めのときの場面描写が強烈で、妖艶な夢物語とは大きく相違して、人も建物も火焰に包まれ、主人公もまた必死の思いで庭を突つ切り築地を乗り越え、京の大路を走って逃げている。一瞬のうちに大火となって業平も后も紅蓮の炎に飲み込まれる大惨事である。

この結末についてはどこまでが夢で、どこからが現実なのか分からないような書き方がなされているが、火事の一件はもちろん夢の中、平野神社へ走っているあたり





『新編浮世草子怪談集』より転載

で現実世界に回帰したことになるのだろう。いずれにしてもこの話では怪談仕立ての物語に改変されており、さらにその根底に伊勢物語は邪淫の書とする思想が横たわっている。

江戸時代には儒学者などから、源氏物語は姦淫、好色の書とされたことは有名であり、伊勢物語についても「源氏、伊勢物語は、こころのいたづらになりぬべき物なり」（『日本永代蔵』巻二一）とされていた。本書『玉櫛笥』もそれと軌を同じくして「伊勢物がたりにかける業平一

生の所業を、初学の人あしくこころへ、えんにやさしきふるまひなりとうらやみ、好色の方人（かたど）とし、陰陽の神なりとあがむるは、いかばかりのあやまりぞや」と道灌の口を藉りて言わせている。ちなみに『玉櫛笥』は元禄八年（一六九五）の刊行。作者は書肆の文会堂、すなわち林義端（一六六三—一七一）である。

この『玉櫛笥』はまた、明和九年（一七七二）安永元年）刊、犬井貞恕の『謡曲拾葉抄』雲林院の項に記された、

近來の板本に玉笥と云る草子有、此謡のおもかけ（おもかけ）を具（たも）にかけり。此草子証文もなし。但此玉笥は、此うたひに本付て書る歟。尋ぬへし。

の「玉笥」は恐らくこの『玉櫛笥』を指していると思われる。ここに能のおもかけを読み取っているのはさすがであるが、怪談仕立てや伊勢物語批判については言及を避けたようである。

さて『玉櫛笥』と『業平夢物語』との比較であるが、前に触れた『夢物かたり』には載りながら『業平夢物語』では薄められ切り落とされていた「うちも寝ななん」の二条の後・五条の後論争や、尼の案内で障子の破れから中を覗く場面などは、この『玉櫛笥』の話にも、非常に

似た形で載せられている。このことから、この『玉櫛笥』は絵巻の『業平夢物語』ではなく、『夢物かたり』ないしはそれと同系のテキストを参照して、怪談に再構成したものと考えられる。同じような現象は「赤松美作」という人名においても見られ、『夢物かたり』の「この夢は赤松美作といふ人、ひるねの夢に」とあるのが、『玉櫛笥』では道灌が「先年、赤松美作守といふ人も」と語っていて、『玉櫛笥』が『夢物かたり』に依拠したことはほぼ間違いないだろう。

この「赤松美作」という人名、実は次に述べる『赤松五郎物語』という作品において、非常に重要な意味を持つてくる名前なのである。

#### 四 『赤松五郎物語』

『業平夢物語』と『赤松五郎物語』とが、よく似た内容であることは以前から指摘されていた。ただ両者の間には、本文に大きな差異があり、『赤松五郎物語』は後半に長い後日譚を載せている点で、同系とされながらも別作品とする見方もなされてきた。次に『赤松五郎物語』

のあらすじを示す。

赤松五郎という年齢は二十歳、名門の武士で、音曲、連歌、和歌にも優れた貴公子。弥生の末のまどろみの夢に、ある山中、飾り磨かれた御所を見出し、不思議に思いながら邸内に入って所々を見めぐるうち、落花吹き込む室内に女房装束の若い女性がいるのを見て、心惹かれる。そこへ五十歳ほどの尼が現れたので声を掛ける。(会話文、一部欠落) 五郎が「現在の都は兵乱うち続き荒廃している」と話すと尼は落涙する。五郎がこの御所のことを尋ねると、尼は他言を禁じた上で、ここは二条の後の御所、山向こうには業平の御所があり、これから業平がやって来るところと言う。五郎は尼に一見させてもらうように頼み、隠れて覗いていると、年のころ二十四五とおぼしき男性が牛車で訪れ、姫君とむつまじげに寄り添う。そして夜も暗いうちに帰って行った。

五郎は残された姫君にあくがれ、尼に我が恋心を伝えるように頼むと、尼は拒否するものの五郎の執心に負け、五郎の和歌、

しらせばや主ある宿のつまをなをしのぶの草の生ふる

ならひは

を伝える。姫君は業平の帰った寂しさから興味を示し、もらすなよ人の心のかけひよりたえ／＼つたふ水茎のあと

と返歌し、五郎を呼び寄せて、夜もすがら語り明かした。姫君は別れ際に「心ざしあらば卯月八日のころ来たり給へ」と言つたところで、五郎の夢が覚めた。二時ふたとき（四時間）ほどの夢であつた。

五郎は姫君のおもかげを忘れられず病づき、夢の次第を書き記すと、三月二十九日に二二歳で亡くなつた。それを看取つた妻は丁重な葬儀を催した。成仏間違いなしと思われたが、ある人の夢に五郎が彼の姫君と語らつてゐる姿が見えたのであつた。

五郎の妻は十八の若さで髪を切り、嗟峨の奥、恵林寺に入つて夫と自分の後世を祈つたが、夢に五郎が現れ、「自分は光源氏の再来、戒行つたなく赤松という賤しき家に生まれたが、あなたの祈りによつて兜率天に生まれ変わることができた。あなたの成仏も間違いない」と感謝し、業平・二条の后への供養も依頼して消えていった。彼女はその後にも尼修行に精進した。

というものである。なお巻末に、この物語は五郎の手記を種に、人々を仏道に誘うために書かれた、という奥書風の一文が付されている。

此物語：五郎書留し筆の跡をたねとして、狂言綺語の言葉こそへて、あさきより、心如実相の、ふかき妙理に入らしめ、成等正覚の、いんゑんとせんためなり。：

大永六年二月日

親永書畢

というものである。

私は以前、『赤松五郎物語』—業平・二条后幻想と尼寺—という論考ロを発表したことがあり、ここでは、五郎が訪れた魔境としての御所、業平・二条の後の逢瀬の夢幻性、五郎の唐突な死をめぐる謎、妄執と救済、恵林寺という尼寺、『赤松五郎物語』と禅宗との近縁性などについて論じた。今回、その論を踏まえ、少しく補足を試みたい。

主人公が夢から目覚めるところで終わる『業平夢物語』に対し、『赤松五郎物語』と『夢物かたり』は、主人公が夢覚めて命を落としてからの後日譚が記されているところに大きな差異がある。さらに『赤松五郎物語』と『夢

物かたり』の間にも、また大きな相違がみられる。『夢物かたり』は、主人公の男の死から三年後、彼の書き付けが鎧唐櫃から出てきた、その男が赤松美作という人であつたと記し、その書き付けを「なか／＼ためしなく不思議なる事なれば、後の物語にもとて、かきうつし侍る」と記すのみで、この書き付けを元に物語化した形跡は認められない。

一方、『赤松五郎物語』は、夢の世界から戻つた主人公（赤松五郎）には年若い妻がおり、病み付いた五郎を懇切に介抱する。そして薬石効なく五郎が世を去ると葬札をはじめ後の供養を嚴重に修して、いまだ十八歳という若い身空で剃髪し、嵯峨の恵林寺に籠り、仏道修行に明け暮れた。彼女の夢に五郎が現れ、「自分は光源氏の生まれ変わり、石山寺で源氏供養が行われたものの、戒行つたない身の上、賤しい武家の家に生を享けたのだ。今後、業平と二条の後の菩提を祈つてほしい。あなたは必ず成仏できるでしょう」と告げたのであつた。その後、彼女は仏道修行の劫積もつて悟道、得法したという。最初は五郎の不思議な夢を語りながら、後半は彼女の出家、得道が中心となつてゐる。

『赤松五郎物語』は、五郎の手記を物語化したという。それではその物語化の方法であるが、その書き手は後半の主人公、五郎の妻と考へるのが自然であろう。夫を看取り、盛大な葬儀を挙行し、剃髪、恵林寺入寺、尼修行、五郎との夢中の会話、等々、少し客観化されてはいるが、これを書ける立場の人は五郎の妻をおいて他に求め難く、彼女と想定して不都合は見つからない。夫との余りにも早く訪れた死別、また余りにも短かつた夫婦生活、さらに夫自らが語る余りにも奇異な死の真実、それを世の人々に知らせ、仏道に導く機縁とせんことを願つた人、とすればその人こそ五郎の妻であり、奥書に署名してゐる「親永」その人なのであらう。<sup>12</sup> 姓も通称も記さず、ただに「親永」とのみ書かれてゐるは、法名だからである。この『赤松五郎物語』は赤松五郎の妻、出家して親永を名乗つた女性が、亡夫の書き置いた不思議な夢の記録を、彼の実体験と見なして、人々に仏道結縁を勧めるべく一編の物語としたものなだらう。

ただ、そうした場合、妻の出家を描いていない『夢物かたり』は、『赤松五郎物語』の大永六年（一一五二六）より前の成立となりそうである。男の書き付け（手記）

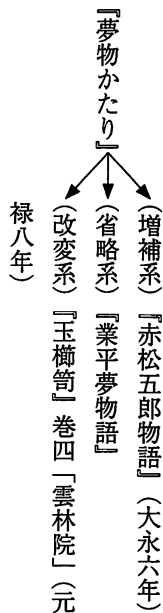
なるものは『夢物かたり』に近い形態であったと考えられ、その成立は男の死以前、葬儀、妻の出家といった一連の出来事を終えた大永六年より、恐らく数年〜一〇年ほど前の期間ではなかったろうか。

最後に「赤松五郎・美作守」という人については、実在の人物のようでもあり、架空の人のようでもある。『夢物かたり』には「この夢は赤松美作といふ人、ひるねの夢に」としか記していないし、『赤松五郎物語』の「五郎」というのもここだけに見える名で創作のようにも見える。ともあれ統群書類従五下所収の『赤松系図』(七種)には五郎、美作守の条件に合う人物は見当たらない。

## 終わりに

『業平夢物語』は実に片々たる小品であるが、こうしてバリエーションを比較してみると、この作品が持つ主題が次第に明らかになって来たと言える。物語化の契機は『伊勢物語』を愛読し、謡曲『雲林院』に心酔した人物が、業平と入内する以前の二条の后との純愛を夢想し、その場面を確認したいという願望から始まり、

小さな物語『夢物かたり』が編み出されたのではなからうか。そしてそれがささやかな作品に結晶すると、今度はそれを核として、より夢想的で詩的な『業平夢物語』絵巻へ、あるいは内容を増補して女人出家の救済を説く『赤松五郎物語』へと意匠を変えて展開していったのであろう。さらに時代が下れば、『玉櫛笥』のような、純愛の恋をも邪恋と捉える倫理観の下、燃え盛る火焰に身を焼く墮地獄の光景に転じてみせた作品にも変貌した。これら四作品の関係を図示すれば、



ということにならうか。

遠い昔の美女を愛し、その深い志が通じて夢の中でその恋が成就する。一夜を共にし、暁の別れの際には次に逢う日時を約束するも、ふたたびその二人が逢うことはできない……。そういう『赤松五郎物語』に似た話がそれ以前にもあった。鎌倉時代の説話集『続古事談』卷六一五、一七四の「張喙と楊貴妃」の話である。

張喩という男が、遠い昔の楊貴妃に恋をして馬嵬に至り、恋い焦がれていると、夢の中で貴妃が現れ、招かれてその宮殿に行く。そこで想いを告げて玉床に登ろうとするが身が重くて登れない。貴妃から与えられた香湯を浴びて玉床に登り、男女の情を交わした。「なつかしくむつまじき事、すべて詞も及ばず」という様子。別れるとき貴妃は十五日後の再会を約束した。張喩がその日に約束の場所に行くと、野煙渺茫とした広野。牧童に聞くと早朝、天女から渡されたという一通の書を残して消え去った。そこには「天上歡樂雖可樂人間聚散亦堪悲」という句があった。

というもの。末尾に「人の思ひのむなしからざる事、古今もへだつる事なく、天上・人間ものをのづからかよふまことにあはれなる事也」という評語が加えられている。これは中国の『驪山記』『温泉記』の翻案であるが、時代を異にする美女と一夜の契りを結ぶところが、よく似ている。夢幻的であり、また怪奇的でもある。

絵巻であった『業平夢物語』では、業平と二条の后がどのように描かれていたか、是非一見したいものと思われるのではない。

#### 注

- (1) 島津久基編、市古貞次校注『続お伽草子』(岩波文庫、一九五六)
- (2) 『国史大辞典』(吉川弘文館、一九七九)
- (3) 上坂信男「謡曲「雲林院」以後」(『磔』一八八、二〇〇・二・六)
- (4) 横道萬里雄・表章校注、日本古典文学大系『謡曲集』上(岩波書店、一九六〇)
- (5) 里井陸郎『謡曲百選』(笠間書院、一九七九)。飯塚恵理人「伊勢物語古注釈と世阿弥自筆能本『雲林院』の後場をめぐって」(『椋山国文学』一六、一九九二・三)
- (6) 国文注釈全書『謡曲拾葉抄』(皇学書院、一九一三)
- (7) 今西實「夢物語二題(翻刻)」(『山辺道』三三三、一九八九・三)
- (8) 石川透氏は「中世の注釈では、この「うちも寝な、ん」の歌を二条后とするのが一般的である。ただ一つ、『三条西家流伊勢物語系図』が「五条わたりの女は五条后(伊勢物語の研究「資料編」)と記している。(中略)『業平夢物語』の作者は、このような「あるじ」という人物と、この歌の作者を誤解してこのように表記したのかもしれない」(『室町物語と古注釈』三弥井書店、二〇〇二、五七頁)と

解されている。

(9) 木越治編『新編浮世草子怪談集』(国書刊行会、二〇一六)

(10) 注9の解説で「雲林院」の典拠として『武者物語』を挙げ  
るが、同書の道灌の話は『業平夢物語』などと関係しない  
話である。

(11) 沢井耐三『室町物語と古俳諧』(三弥井書店、二〇一四)

(12) 慶応義塾大学メディアセンターデジタルコレクションの  
『赤松五郎物語』の画像では全文一筆で、「親永」自身の著  
作とも考えられる。

(13) 注8石川前掲書五五頁は、『赤松五郎物語』の「木賊色の  
狩衣」の語は謡曲『雲林院』の、古本には見えず現行曲に  
載ることから、大永六年には現行曲が出来ていたか、と指  
摘する。禅竹改作であれば矛盾しない。

(14) 阿部好臣『赤松五郎物語—その夢の位置—』(『日本文学』  
三一—二、一九八二・二。後に『創生と変容』笠間書院に所  
収)にも赤松五郎が検討されている。

(15) 川端善明・荒木浩校注、新日本古典文学大系『古事談・続  
古事談』(岩波書店、二〇〇五)

(さわいたいぞう・本学名誉教授)